

新しい一步をスタンフォードから

静岡県立こども病院 土屋 裕一郎

1. 学会の国際化と私たちが目指すべき学会

「韓国や中国に負けたら悔しくないですか？」白熱する深夜のディスカッションの中盤に JSRT 会員が放った言葉である。規模の大きなシンポジウムなどではおそらく発言されない（出来ない）問い合わせである。ほぼ初対面ではあるが、21名の異国での苦楽をともに過ごした研修生同士だからこそぶつけられる綺麗ごとでない本音であろう。

私は学会の国際化は必須であると思う。それはアジアでのイニシアティブであり、我が国の放射線技師が研究者として海外輸出される布石であり、試金石にもなると感じている点が理由である。スタンフォード大学病院・3D ラボを見学して感じたことは、我が国の放射線技師の技術レベル・知識レベルはおそらく世界一ということである。我々日本人の放射線技師ほどの広い分野の学識と専門性、臨床経験を横断的に持ち合わせた専門職は世界中を探しても見つからないであろう。我が国の放射線技師に対する教育水準の高さを改めて実感した瞬間でもあった。ただひとつの負の因子、英語力を除いて。

最近の20年で放射線技師の教育環境と職域は、技術学会の貢献を含め大きく成長したと思う。4年制大学化・大学院の設置・学位取得気運の高まり・国際学会派遣制度・海外研修派遣制度・英語論文誌発刊などがそれにあたる。これらの構造や制度は放射線技師の将来を真剣に考えた先人達の実績と提案により具現化してきた。先人達はおそらく自分達の為ではなく、将来、後輩達が必要とする制度を見据えてこれらの環境を整えてきたに違いない。つまり、今後我々は自分達が今必要とする制度やシステムを構築すること同時に、将来まだ見ぬ後輩達が必要とする制度・環境を整えることに注力する必要がある。私が深夜のディスカッションの果てに個人的にイメージした学術大会の骨子は以下である。現在の春の総会を10年後に総演題数の半数以上を英語演題とした国際学会に移行。英語演題発表者にインセンティブを提供（参加登録費無料など）。教育講演・ビギナーズセミナーなど生涯教育としての学習の場を現在の2~3倍に。参加者5000人規模を想定。早朝マラソン大会の開催である。

2. 研修で得たこと

研修参加の動機は研究活動再開へ向けたモチベーションと研究テーマの獲得であった。結論を言えば、超一流の講師陣と全国から選抜された会員とのディスカッションはその目的を達成するためには十分過ぎる環境であった。

Moseley 教授はある講義で“なでしこジャパン”と“JSRT”をなぞらえてこう言った、「シートチャンスは毎日ある！」。そして最終日、講義の最後をこう締めくくった、「目と心をもっと開きなさい！ 視野を広く持ちなさい！」。これは JSRT 会員への最大限のエールであると共に、医業界への警鐘であると私は感じた。分子イメージングに明るい未来があることについて異論を唱えるものはいない、そして近い将来さまざまな業界が入り乱れた様々な嵐が起こると Moseley 教授は予想している。私はこの研修で自身の研究活動への大きなインスピレーションを受けたと同時にほとんど独占職種としてイメージング産業に関わっていけると錯覚していた自分自身に危機感を覚えた。

謝辞

本研修プログラムは本当に多くの方のサポートの基に成り立っていると強く感じた。スタンフォード大学、ルーカスセンター、GEHC-J、学会、引率、通訳、所属施設、家族すべての関係者の方々に心から感謝申し上げます。



左上:活発に質問する7期研修生。

左下:連日連夜の討論会。右:Moseley 教授とのオフショット。BFF(Best Friend Forever)は一番の思い出。(右:筆者)